

平塚柔道物語 4 9

激励の手紙

平塚柔道協会 会長 奥山晴治

中学柔道の世界では、全国大会へ出場するまでに、いくつもの壁を越えなければならない。市大会・地区大会、そして県大会へと駒を進め、団体戦なら優勝した1チームのみ、個人戦も各階級の優勝者1名のみが全国大会へ出場することができるのだ。そして、その大会が開かれるのは毎年夏の一度きり。

浜岳中学柔道部員たちは、毎年夏のこの大会で勝ち上がり、全国の頂点に立つことを目標に稽古に励んできた。例年、県大会まではほとんどの3年生は出場するが、そこで最後の1つの座を巡って各階級で壮絶なドラマが展開され、多くの選手が途中で悔し涙を流すことになる。

県大会の前日、松澤ヒデキのお母さんが顧問の真田州二郎教師に会った。真田先生は仕事が教育事務所の勤務になっていたため、朝と夕方しか県大会の会場へ行くことができない、と聞いていた。夕方、彼女は先生に声をかけた。「先生、いよいよ明日ですね。でも明日はお仕事とか・・・夕方間に合えば準決勝あたりからの試合は見るできるので、良かったですね」ところが真田は表情を曇らせた。「僕は別に準決勝や決勝を見たいわけじゃないんです。そこまで勝ち上がる者は、関東大会や全国大会へ進むことができ、僕もまだ彼らの試合を見るチャンスが残されます。でも残念なことに、途中で負けてしまう者が出るのもわかっています。彼らにとっては、それが中学校生活最後の公式戦になるわけです。これまでずっと指導して来た自分が、その最後の試合を見てやれないことが悔しくてしかたがないんですよ」。彼女はその言葉を聞き、真田先生が本当に一人ひとりの生徒のことを常に大切に考えておられることを改めて知ったという。

そして迎えた県大会の個人戦の当日、彼女は早朝、息子を学校に送って行くと、柔道部3年生の生徒一人ひとりに何かを手渡している真田先生の姿を見たのでした。

「今日、残念ながら先生はお前たちの試合を見る事が出来ない。そこで夜中にふと思いついて、お前たち一人ずつに手紙を書いて来た。

3年生の分が書き終わったら、もう夜が明けていたから、申し訳ないが、3年生の分しかない」と真田先生の話。

彼女は、そのまま選手たちを数人車に乗せ、試合会場まで移動することになっていたが、乗り込んできた中に、真田先生から手紙を受け取った3年生が一人いた。当然、同乗した後輩たちの関心はその手紙の内容にあった。「先輩、何が書いてあるんですか、読んで下さいよ」と松澤ヒデキが言う。すると、その3年生は自分への手紙を読んできた。

「鈴木敏誠へ、今回の団体戦では出してあげることが出来なかったけど、お前の実力は何処のチームに行っても間違いなくレギュラーに入る実力があります・・・一途中省略・・・お前の一番得意な柔道を今日は思いっきり楽しんで来い。背が小さいのだから相四つ相手に引き手から。釣り手から持って行った時にはすぐに逆一本を出すこと。手も足も絶対に止めるなよ。足技を中心に攻め立て、担ぎを使っている時のお前は誰にも止められない。今日は一日そばについてあげられないけど、お前の勝利を信じ願っています。一番の敵は自分自身の弱気。弱気な自分を吹っ飛ばす気迫ある試合をしろよ。必ず勝てる。やれる。お前が最強だ。不可能なんて無い。自分がやって来たことを信じろ。努力は報われる。神様はいるぞ。真田州二郎」。その手紙は鈴木敏誠君ただ一人だけ宛てて書かれた先生からの心からの激励の手紙だった。彼女はこのような手紙を3年生全員（11人）に宛てて書かれたことを思うと思わず涙があふれてきたとのことであった。

先生の生徒を想う真の情熱は、相手のみならず、周囲の人をも感動させてしまうものである。



松澤ヒデキ君と鈴木敏誠君